
電車

結城ひいる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

電車

【Nコード】

N1189R

【作者名】

結城ひいる

【あらすじ】

電車に乗っていた。私はシートに横たわり、父は祖母と戯れ、弟たちは笑っていた。

（前書き）

夢で見たはなしです。

電車に乗っている。京成電鉄の赤紫のシートに、私は横たわっていた。

枕に頭を寄せ、かいまきをかけて、まるで布団で眠りに付くような体制でいる。

電車が駅に止まり、数人が乗りみ、その中の一人のスーツの上に黒いコートを着込んだサラリーマンと思われる中年の男性が、私の前に来た。座りたいという雰囲気とその男から感じ、私はかけていたかいまきを落さないように気をつけながら起き上がり、体を端にずらした。それを見届けると男は私の隣に座った。太り気味のその男の肩が、私の肩と密着し、嫌な気分になった。意識をそらそうとあたりを見渡すと、父親が、新幹線の椅子のような席に座っていた。父の膝の上には、なぜか母方の祖母が座っており、その祖母の下半身は、パンツ以外なにもまとっていなかった。祖母が父の膝からずり落ちそうになるのを、父が笑いながら支えている。祖母と父の上には、黄色と紫のかいまきがかけられており、父はパンツ姿を見られるのを笑いながら嫌がる祖母を、そのかいまきで、隠しているように見えた。私は得体の知れぬ気持ち悪さと、少しの愉快さを覚えた。

隣の男性からのがれ、後ろの車両に行くと、私の弟が新幹線のような席で六人ほどの友達と思われる人たちと談笑していた。弟一人に注目していた私ははじめ気が付かなかったが、弟をはじめそこにいる男子たちは皆同じ顔をしていた。

私は、声をかけようか迷ってから、自分がさっきまで座っていた席に戻った。

ふと目を覚ますと、私はまだ電車の中にいた。乗客がだいぶ少なくなっている。私は乗り過ぎてしまったのかと、焦り、あたりを見回すと、前の方の席では、まだ父と祖母がいて、後ろの車両には弟と同じ顔をした友達たちがいた。

目的の駅に到着した。電車を降りて、目の前の車につながれた、貨物車の車両のような荷台に乗り込んだ。雪景色のなかをしばらく進むと、庭のような芝生に囲まれた道に出た。その芝生の中の道沿いに進むと、部屋の大きな窓が目立つ、大邸宅の前まで来て、車は止まった。

私が荷台から降りると、その家に住む私の父方の祖父が出てきて、私を部屋まで案内した。案内された部屋は、ここにいる間の私の部屋。大きなガラス張りの窓の向こうには雪景色が広がっていた。窓の上の方には、クリスマスの飾りのような電極が赤色に点滅している。

私は部屋を出て、家の中を歩き回る、しばらく歩くと、小規模に展開されたUNICROがあり、その少し先には、300円ショップがあった。さらに歩くと、遠めに、祖父が小走りに横切っていくのが見えた。私は、その後を追いつ、廊下を早歩きで通過する。祖父の後を追っていくと、大きなエレベーターの扉のようなものが見えてきた。そこには先客がいた。三人の12歳くらいの男の子だ。三人の少し後ろでとまり様子を伺うと、ココはゲームの入り口らしい。扉の向こうで、シューティングゲームができるそうだ。三人がその扉の中に消えていき、私も扉の前まで進んだ。三メートルほどある大きな扉で、中の光が漏れてそのふちは黄金に輝いている。

しばらく扉の前にいると、祖父と思われる声で、ゲームの説明というのか、ファイナルファンタジーの冒頭のような語りが流れてきた。

語りが終わると扉が開く。

中にはいると、ところどころに黄色い証明はあるものの、暗い廊下のような場所があった。どこからかさっき入っていった少年たちの声も聞こえる。小さな話し声は少し怖がつたいるように聞こえる。

暗い廊下のような道を無心で歩き続けると、ゴールのような不気味の場所に着いた。入り口よりも小ぶりだが、同じような扉を囲うように、コンクリートが突き出ており、見上げると手術中のランプのような形の明かりが、ともっていた。少年たちは私の前におり、私には気が付かないようすで、こそこそ怖がつている。少年たちが横にどいたので、私は扉の前まで進んだ。そのとたん、また入り口と同じように祖父と思われるような声がした。ファイナルファンタジーの終わりのような語りの後、扉がひらく。どうやら本当にゴールだったようだ。

扉を抜けると、少年たちが私を追い越すように走り抜ける。少年たちが駆けつけた先には祖父が立っていた。少年たちが祖父になにか話している、あのゲームの不評を言われているようだ。

そういえば、なぜ電車には母が乗っていなかったのだろうか。

（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。
あなたの感想が聞きたいです。
コメントしていただけますか？

結城ひいる

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1189r/>

電車

2011年10月5日13時46分発行